

琉球大学学術リポジトリ

農業考古と図像資料

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2016-01-28 キーワード (Ja): 農業考古, 収穫具, 画像石(磚), 八重山農耕図, 石包丁, 鉄鎌 キーワード (En): 作成者: 後藤, 雅彦, Goto, Masahiko メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/33165 |

農業考古と図像資料

後藤 雅彦

Agricultural Archaeology and Iconographic Archives

Masahiko GOTO

要旨

本稿では農業に関する考古学研究（農業考古）の中で収穫具について、中国漢代の画像石（磚）（「漁獵収穫画像磚」）と琉球列島の『八重山蔵元絵師画稿集』の「八重山農耕図」という図像資料に描かれている稲の収穫についてとりあげ、図像資料の有効性を検討した。そして、図像資料は対象（作物）・方法・道具（収穫具）の同時代での相関関係を示すものであり、さらに図像資料を媒介して考古学資料、文献史料、そして民族・民俗学事例の研究上の接点が浮かびあがってくると考えた。

キーワード：農業考古、収穫具、画像石（磚）、八重山農耕図、石包丁、鉄鎌

はじめに

中国考古学では研究テーマによって、その対象とする分野を示すことが多く、「農業考古」もその一つにあげられ、学術雑誌として『農業考古』が刊行されている。この『農業考古』の編集に携わっている陳文華（2002）は「農業考古」に関する論考は多く、考古資料としては農具などの遺物の他に画像石（磚）や陶製模型などを検討している。

また、外山秀一（1995）らは稲作文化について、その構成要素を大きく3つの資料群に分けて検討している。すなわち、第1次資料群としてイネ（稲作農耕の存在を直接的に実証し得る植物遺存資料、大型植物遺体、微化石、籾殻圧痕土器）、第2次資料群として稲作技術（稲作農耕の技術面での存在を示す資料、石器組成、木製農耕具、水田址、水利施設）、第3次資料群として生活様式（稲作農耕の波及の結果として誘引された人々の生活様式の変化を示す資料、土器様式、遺跡立地、集落構造、墓制、農耕儀礼）があげられる。

こうした諸要素を整理することは重要であり、稲作文化に関わらず、農耕文化として、作物、技術、生活様式と大きく3分野に分けることができる。しかしながら、技術に関しても遺物研究のみでは、その使用法や動作、あるいは作業過程から作業風景などについて明らかにするのは困難な場合も多い。その点、図像資料は具体的であり、興味深い資料といえる。渡部武（2010）は古代中国の稲作の実態について、文献史料中に断片的に言及されているが、それらは図像資料ではないので、語彙や文脈をめぐって解釈の差や論争があり「共通の理解に到達するのが難しい」

とし、一方、副葬品である陂塘稻田模型および墓室を飾る画像や磚画像石など「目で見て誰もが容易に理解できる材料」をとりあげ検討している。

1、農業考古と収穫具について

石毛直道（1968）は、稲の収穫法として、茎を切り位置の高さによって、根刈、高刈、穂摘に3大別している。根刈りは地上すれすれの高さで刈り取る方式で、ワラの利用という面にもつながる。高刈は地上30～60cmの部分で刈り取るもので東南アジアの多くの場所で一般的で、高刈後は放牧した水牛の飼料、場所によって雨期の前に刈り株を焼きはらい肥料とする。高刈の収穫具には日本の稲刈鎌と同類の鎌、鋸鎌の他に柄に鳥のクチバシ状の付属具のついた専用の鎌もある。そして東南アジアの島嶼部では稲穂の稈部より摘み取る穂摘の方法もある。普通は鎌で高刈するが、儀礼的な収穫には穂摘みする事例などから、過去にさかのぼれば、稲の収穫法は穂摘が一般的であったと推定している。

鹿野忠雄（1946）は、東南アジアの原住民の稲の収穫について、チベットビルマ語系民族による根刈りとオーストロネシア語族の穂摘みに大別し、後者について台湾原住民から沖縄においてもみられるとしている。そして、穂摘具の種類、先史時代の石包丁の分布、さらに石包丁と貝製穂摘具の関係に言及している。

そして、考古学研究では収穫具（とくに石包丁）の類型化と分布が検討されている。安志敏（1955）は、中国全土の「石刀」を集成し、三類に大別した。それは、日本で石包丁と呼ばれるものを甲類、鎌類を乙類、そして有柄石刀を丙類としたものである。さらに、各類において形態的に細分し、各々の分布を、時間、空間的に捉えた。また用途について検討し、石製品以外の材質の収穫具についても論じている。

その後、日本人研究者によって、日本の稲作の伝来を追求するという目的で、石包丁の研究が進んだ。これは、石包丁の分布から農耕の伝播を求めるというもので、石毛直道（1968）は「日本稲作の系譜」の中で、華北で粟の収穫具として石包丁が出現し、それが長江下流域に伝わり、稲の収穫具に転用されたものが、日本や朝鮮に水稻農耕と伴に伝播したものと考えた。また、同氏は、豊富な民俗例を踏まえた上で、実験によって石包丁を穂摘具とする説を補強し、その使用法を想定した。下條信行（1980）も、九州の石包丁と中国や朝鮮の石包丁を比較したが、その系譜は中国長江下流域に直接的に求められないという結論に達している。いずれにしても、収穫具（特に石刀）の分布が、農耕の伝播に対しても重大な根拠となるという考えに基づくことにはかわりない。同氏の比較は、形態的な特徴のみならず、製作技法（特に穿孔技術についてである）の比較にまで及んでいるが、この製作技法の問題も重要である。すなわち、石器の用途はその製作技法によって決定され、画一的な技法によって量産されるものである。その後も、石包丁に関する関心は高く、寺澤薫（1995）によっても詳細な集成的な研究が行われている。

また、中国の事例をもとにした分布論として、中村慎一（2002）は、良渚文化の石鎌は刃渡り15～20cmで、寺澤氏の分類の「中型鎌＝稲の根刈り用切鎌」の範疇に入るとし、それが続く馬橋文化期になると、良渚文化期に基本的に欠如していた石包丁が、数量的に石鎌を凌駕するようになるとし、石包丁の分布を概観する中、マクロな見方では"周縁での残存"が捉えられるが、

ミクロな視点で、長江下流域では逆行現象もみられることを指摘している。この逆行現象は人口減少と関係があると想定され、さらに土地に対する人口圧が低くなる原因には人口稠密な地域から稀薄な地域へ移住が行われた場合があるとして日本の石包丁を理解している。

また、石包丁と石鎌の関係についても言及している（中村1996）。すなわち、日本考古学においてかつて弥生時代における石包丁から鉄鎌への転換をイネの登熟期の均一化への対応として理解が示されていたが⁽¹⁾、その後の考古学研究の進展により、現在では説得力に欠けるようになったものの、その視点は有効であると指摘する。そして、石包丁から鎌への転換という現象の理解は日本という稲作後進地域ではなく、一時的な起源地で検討されるべきとし、長江下流域において石包丁が石鎌に先行し、石鎌出現以後も石包丁が存続することについて、臼・杵による脱穀にあたっては根刈りした株のままでは都合がわるく、稲藁の利用とも合わせて、稲摘み具と根刈り鎌が長期にわたり併存したと想定している。

2、漢代の図像資料と農業考古

漢代の図像資料である画像石（磚）の中で、収穫に関わるものとして、四川省陽子山の事例（「漁獵収穫画像磚」）はとくに有名である（第1図）。ここでは、諸見解をとりあげ、当該図像資料の農業考古としての評価を整理したい。

甲元真之（1975）は、同資料について中央の3人はその動作から穀物の穂首を刈りとり、左側の一人は、刈りとった穂首を集めたばね、竿の両端につけて運搬している様子で、同図が「同一場所における収穫に関する作業過程を表現」したものと理解する。そして左側の鎌をもった2人は爪鎌などで穂首刈りした後の残茎を根元から刈りとっているという二度刈りを想定している。中国の鎌について鎌身が大きく柄の長い鎌は、収穫具というよりも他の用途が想定され、漢代以前の鎌出土遺跡から必ず石包丁や貝包丁などの穂首刈りの遺物が伴出することから「二度刈り」の習慣が広がっていたとする。

陳文華（1989）は、左に描かれた3人は稲穂を刈り取って、括って束にし、一番左の一人が括られた稲穂を担いで運ぼうとし、左側の2人は鋏鎌（両刃の鎌）を振りあげ稲株を刈り倒しているとした。そして、このような方法について、まず銚を用いて穂を刈り取る古い伝統的習慣の現れ、第2に撒播の稲田で実施するのに適した措置、第3に運搬に要する労力を軽減できる利点があり、すでに田植技術を習得し、鋭利な鉄鎌を有しているにもかかわらず現在の海南島の黎族で利用されているという。出土資料との関わりでは、漢代には収穫用農具は一般的に鉄鎌が用いられており、戦国時代に用いられた鉄製の銚（穂摘具）は出土していない点も指摘されている。

また、湖北省江陵出土の稲4束が株ごと刈ってあることから、前漢時代に地域によっては株ごと刈る収穫方法が採用されていたとしている。

渡部武（1991）は、「中央の稲刈りをしている三人の人物は、左手で稲穂を握り右手でこれを刈り取っている。右手には短柄の稲刈り鎌を所持している様子はみられず、（銚）で穂刈り」していた。そして、左側の人物は刈り取られた稲穂を束ね天秤で担いでいる。右側の二人は大鎌を振りかざして稲株をなぎはらっている。そして、この長柄大鎌は文献上「鋏」と記され、その実物も四川省新津県および湖北省から出土しているという。大鎌（鋏）の出土例としては双流県牧馬山

漢墓出土の鉄鎌があげられる（徐1995）

林巳奈夫（1992）は、人物の足首から下がみえないことから水田に入っている光景とし、「中央より少し左寄りに二人が腰をかかめているのは稲の穂を摘んでいるところ」、そのうしろの人物は「束ねた穂をかついで運んでゆくところ」、画面右手の二人は柄の長い鎌をふって、「穂を摘んだあとの茎をなぎ倒しているところ」とみた。

上記の見解は細かい記述に差があるものの、総じて、穀物（稲）の穂刈り後、大きな鎌で稲株をなぎはらう、あるいは二度刈りするという状況が想定されるのである。そして、論者によって、考古資料との整合性、出土遺物では鉄鎌がすでに用いられている点、あるいは根刈りの状況を示す資料の存在など、当時の収穫法について、さらに言及しているのである。

ところで、上記のような図像資料の読み込みが一致している事例とそうでない場合が渡部（2010）によって紹介されている。やはり四川省出土の農作画像磚であり、畔で区切られた耕地で、大きな鎌（鎌）を振り下ろすしぐさをし、背後に大人、子供各一人は播種を行っている。この画像の解釈については、土際から雑草をなぎはらい、後方の2人が種子を撒播しているとする見解、もう一つは祭祀儀礼の舞踊とする見解である。すなわち、大鎌を振り下ろしているしぐさと播種作業をどう理解するかが問題のようで、渡部は東南アジア的な農法の事例（マレー世界の低湿地で犁耕を行わず、大鎌で水田雑草をなぎ倒す）を参考に図像を解析すれば、「画像中の農作業はより合理的に解釈できる」と指摘しており、画像解析の妥当性も問われるのである。

3、琉球列島の図像資料と農業考古

「八重山農耕図」は『八重山蔵元絵師画稿』の中に含まれる農耕の様子を示す図像資料がある（以下、「八重山農耕図」と呼ぶ）。現在、石垣市立八重山博物館に所蔵されている、もともと大正12（1922）年に鎌倉芳太郎氏が蔵元最後の絵師で宮良安宣氏（1862～1931）から入手したのものとして知られる。蔵元廃止（1897年）頃には八重山地方では人頭税があり、この八重山農耕図には、人頭税下における八重山地方の稲刈りから上納米を納めるまでが描かれている。稲刈りについては「水の残る田で、ガキィ（鎌）を使って稲を刈り、それをうしろで束ね、束ねられた稲を馬に積む」という作業の様子が示されている（第2図）（大浜1996）。

また、幕末の『南島雑話』には麦の穂を素手で摘みとる図があるが、稲の収穫は鎌が使用されている図があり、16世紀の朝鮮漁民の漂流記（『李朝実録』）では稲刈りに鎌を使用したとは書かれていないものの、前後の文脈から鉄製の鎌の存在が認められるという（神崎1983）。

そして、琉球列島の民具研究において、収穫具に関して粟の穂刈りと稲刈りに分けて整理されている（神崎1983）。前者にはイラナ、イララと呼ばれる小さな鎌が使用される。イララは柄に小さな平刃を簡単にとりつけ、親指を除く指で柄を握り、親指で稲の茎を押さえてもぎ取るように使う。小鎌使用以前は素手で穂を抜き取ったと考えられる。

『石垣市史各論編民俗 上』（1994）では農耕の中で収穫・調整用具として鎌（ガキィ）と柄鎌（イラナ）をあげている。前者は草刈り、稲刈りなどに使用され、後者は「へ」の字の形をした小さな鎌で、粟や黍を刈り取るのに使用されたとしている。

第1図 中国漢代の画像石（磚）
「漁獵収穫画像磚」
（出典：陳文華1985）

第2図 石垣市立八重山博物館所蔵『八重山蔵元絵師画稿集』の
「八重山農耕図」（出典：石垣市立八重山博物館1993）

第3図 「八重山嶋農具類并士族平民風俗之図」
（琉球大学附属図書館所蔵）

第4図 フルスト原遺跡出土鉄鎌
（出典：石垣市教育委員会1984）

摘穂については日野巖（1963）の報告があり、一つは宮古島の麦の摘穂について、聞き取りの対象が若い人だったためか、その伝統の理由は不詳としながらも、刈り残した茎葉は焼いて灰にして畑の肥料にする、あるいは家畜舎の敷藁にするという返答を紹介している。その鎌は普通の鎌であるが、少し柄の短いもので、特殊な形ではない。ただし、特殊な摘穂具も同地方でも知られ、宮古島狩俣、伊良部島には粟穂を摘みとる小鎌（アーカリザラ）があり、長さ約15cmの柄の上部に長さ約6cm、幅1.5cmの刃が直角または斜めにつく。竹富島にも同じような小鎌がある。波照間島では、小さい竹片をふたつ合せて作ったと称される穂摘具（インスマまたはフドゥス）があり、これで1本ずつ稲穂を摘み取る風習がある。摘み取る対象は麦、粟、稲であるが、これは各々の地方で主穀作が違うからであるとしている。

また、金関丈夫（1955）による収穫具に関する指摘は考古学研究上、重要な意味をもつものとする。すなわち、八重山地方には稲、粟の穂を摘む、イラナあるいはイララと呼ばれる農具（小型の鎌）がある。刃部は鉄利器の破片などを利用する。鉄鎌に接触した後もインドネシア式の、握り包丁式の柄を捨てることができなかった。その柄の形、穂の摘み方は、フィリピンその他の南方諸地方の風俗と同様である。鉄文化に接する以前は、恐らく貝包丁を使用していたと思われる。八重山の遺跡から石鎌や石包丁に相当する石器は未確認であるとした。

まず、鉄器について、刈り取り用の鉄鎌の出土例も知られるが、それ以外に小型鎌も出土している。安里進（1996）はグスク時代遺跡から出土する鉄製の小型鎌について、鉄刃の全長は5～8cmの小型品の直刃鎌で、基部に折り返しがあり、柄に対し鈍角に装着されたと考えられる。さらに先島の民俗事例、近世奄美の麦の穂摘み、15世紀沖縄の稲の「穂刈」などの分析によって、稲・麦・粟などの穂摘鎌であることを指摘した。そして、小型鎌の出土遺跡の立地から、水稻耕作卓越地帯から畑作地帯まで小型鎌が出土することと、15世紀の朝鮮人漂流の記録などから稲に稔熟不揃いの品種と穂摘み収穫があったこと、近世の奄美で麦の穂摘みが行なわれていたことなどから、グスク時代の小型鎌は粟の穂摘みに限らず、稲・麦の穂摘みにも広く用いられたと想定している。

次に貝製品については、盛本勲・比嘉優子（1994）は沖縄の先史時代からグスク時代の遺跡から出土する「貝包丁」「有孔貝製品」「貝包丁様製品」に詳細な検討を加えている。同製品の特徴として「概してクロチョウガイなどのウグイスガイ科の腹縁部を砥磨し、附刃したもの」であり、孔の有無、貝素材の整形および加工箇所、刃部の形状によって分類が行われ、その時間的変遷が追求された。そして、グスク時代前夜のヤジャーガマ遺跡、グスク時代のピロースク遺跡の出土品について、対象物の炭化米や麦などが検出されていることから、穂摘具である蓋然性が高いとする。先史時代の出土品についても、グスク時代例と形態などの類似性、時間的連続性がみられることから、「他の用途や機能を有する道具とみなすよりも、同一のものとみなしたほうが、よりスムーズに理解できる」とした。しかしながら、同氏らは、対象物としての穀類が未検出であることに懸念を示し、搔器的用途、機能の可能性も考慮し、対象物の有無、使用痕などの研究の必要性を説いている。

他に出土遺物から収穫具と想定されるものに、那崎原遺跡出土の鋸歯状の刃部をもつ石器の破損品がある。報告書（那覇市教育委員会1996）では、類例を久米島の北原遺跡、奄美諸島のサモト遺跡、手広遺跡、小手野遺跡の櫛歯状石器に求められる可能性を指摘し、サモト遺跡の報告

書中のベトナム～華南にみられる穂摘具、脱穀具が連想されるという見解を引用し、畑痕との関係で興味深い資料として評価している。

こうした収穫具に対して、三島格（1971）は沖永良部島の古老の話として稲首刈りには古くは、海辺に打上げられたまたとってきた貝殻を利用したことを紹介している⁽²⁾。

4、今後の収穫具研究について

本稿では、図像資料によって、当時の収穫法について想定可能な例を中国漢代と琉球列島近世、近代の事例をあげた。問題は、当然、両者間の関連性ではなく、こうした図像資料と収穫具に関する考古学研究の有機的な関係を如何にみいだすかである。

まず、本稿で主にとりあげた描かれた収穫具は鎌類であり、漢代の事例では穂刈と二度刈りの両者が同一画面に描かれており、両者の形態および法量の差異が図像からもうかがえる。

鎌の研究においても、形態および法量の類型化による機能差の復元は日本考古学の研究の中、民具としての鉄鎌が地域的にきわめて多様性をもっていることをふまえ、現存鉄鎌の機能差が基本的に直刃、曲刃や着装角度の差ではなく、刃弦長（刃渡り）や柄の長さにある点が指摘されている（寺沢1991）。そして、寺沢薫（1991）は、鉄鎌類の統計資料および農書を検討し、刃弦長、刃幅によって、出土鉄鎌の大形式を次のように設定している。

1. 小形鎌 全長10～12cm以下、刃幅ほぼ2cm以下。稲などの穂首収穫用の「穂切り鎌」（高刈り用の茎切り鎌としても使用可）
2. 中形鎌 全長12～18cm前後、刃幅ほぼ2～3cm。最も事例が多く、民具の例からも主体は稲の根刈り鎌。
3. 大形鎌 全長20cm以上。刃幅ほぼ3cm以上。民具例でも除伐用大鎌、鉞鎌として想定。

こうした大別をふまえ、「直刃・曲刃や着装角度の差といった大局的な時間差や準機能的要素、そして各個の形態差といった編年的に優位な型式を抽出していくことによって収穫具の様式的な変遷を追うことができる」とし、収穫具に関する考古学研究の筋道を的確に指摘している。

八重山農耕図に描かれた鎌もおそらく用途的には中形鎌であり、直刃である。寄川和彦（2003）によって八重山博物館所蔵の写真資料の「八重山嶋農具類并士族平民風俗之図」が紹介されている⁽³⁾。この図像資料の中にはヘラ、すき、臼、杵などの農具などが描かれ、名称も方言で記されており、人頭税制下の八重山の民俗や方言などを知る上でも貴重な資料と報告されている。さらに、図中に「喜友名安信」の名がみられるが、鎌倉芳太郎氏寄贈の「蔵元絵師画稿集」には含まれていない資料である。同資料中には、鎌の図も含まれている。

考古資料では1997年に刊行された沖縄県立博物館の『考古資料より見た沖縄の鉄器文化』の中で、8遺跡10点の鉄鎌が紹介されている（第4図）。

ただし、現状では数量的に直刃・曲刃、着装角度などによる類型化を図る状況ではなく、こうした類型化にあたっては、地域差や対象作物の違いなども考慮することが必要であろう。

また、収穫具研究について、対象（作物）、方法、そして道具（収穫具）の相関関係が重要であり、その点、図像資料は同時代の中での相関関係が示されている。そして、考古学的研究ではアプローチしにくい作業過程や作業風景、情景について図像資料から読み取れることも多い⁽⁴⁾。

篠原徹（1988）は穂刈りから根刈りの転換について単に藁の需要の増大ばかりでなく、貯蔵・脱穀・運搬など農耕全般とかかわることは民俗例の教えるところと指摘しており、一連の作業過程の中で把握する必要があるだろう。民俗調査において、安室知（1998）による昭和初期の西表島祖納における稲作の復元の中で、収穫ではマイカリ（稲刈り）は通常5月から6月、稲刈りの直前にならないと田の水を落とさないため、稲刈りの時ぬかるんでおり、膝下程度の浅い田では人が担いで畦まで運び、深い田ではフモリ（田舟）を用いると報告している点は、単に収穫法にとどまらない観察が必要であることを示す。

そして、漢代の漁獵収穫画像磚の中で、上段に陂塘（溜池）においてカモ猟が行われ、陂塘に蓮が植栽され、大魚が泳いでいる内容（渡部2010）があるように、図像資料に描かれた内容の構成、当時の他の活動との関わりを示すものとしても興味深い。

まとめ

以上のように収穫に関する図像資料の有効性は、対象（作物）・方法・道具（収穫具）の同時代での相関関係を示すものであり、さらに図像資料を媒介して考古学資料、文献史料、そして民族・民俗学事例の接点が浮かびあがってくるのである。考古学研究においては、出土事例の集成から類型化、その時代・空間軸の中での位置づけという分布が検討される。それに対し、図像資料について、その資料自体の評価が問われると考える。その内容の妥当な解析から、漢代については類例は豊富とされるが、四川省の事例として、それが中国全域に普遍的な現象を示すのであろうか。また、琉球列島についても事例が一般的なものなのかどうか問題である。

少なくとも民具研究においても形態的、法量的にも多様性を否定できず、その多様性が生みだされた背景こそ、琉球列島に展開した農耕文化の一つの特徴を示すのではないだろうか。

いずれにしても稲作文化の展開にしても、穂摘の段階と根刈の段階の2段階がどのような形で琉球列島において進行したのか、その問題は自地域での変化なのか、他地域からの影響を認めるかなど、検討すべき問題は多く、きわめて重要な問題になると考える。

本稿を執筆するにあたり、山里純一氏（琉球大学法文学部）、松原敏夫氏（琉球大学附属図書館）、寄川和彦氏（石垣市教育委員会）、島袋綾野氏（石垣市立八重山博物館）に多大なるご教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

註

1. 代表的な見解として近藤義郎（1960）によって発表されている。
2. 引用文献中、まず『南日本新聞』（1959年8月12日）「稲の高刈やめよう 大島支庁農家の自覚呼びかき」という記事の要約で奄美大島の一部で高刈（主根株から20cm、あるいは35cmの高さ）を行なっているという内容も紹介されている。
3. この「風俗之図」と内容的に近い資料が琉球大学附属図書館において所蔵されており、第3図はその一部をデジタルカメラで撮影したものである。
4. 考古学的研究上では、やはり一連の農耕に関わる道具類の検討が必要であり、農耕に関する要素として、栽培の過程（耕作から収穫）と収穫後の加工調理の過程を検討することが重要である（楨林2008）。

引用文献

- 安里進1996「グスク時代の小型鎌と穂摘み」『ヒト・モノ・コトバの人類学』國分直一博士米寿記念論文集
- 安室知1998「西表島の水田漁労－水田の潜在力に関する一研究」『琉球弧の農耕文化』大明堂
- 安志敏1955「中国古代的の石刀」『中国科学院考古学報』11
- 石垣市史編集委員会1994『石垣市史 各論編 民俗 上』
- 石垣市立八重山博物館1993『八重山蔵元絵師画稿集』
- 石毛直道1968「日本稲作の系譜（上）－稲の収穫法」『史林』51-5・6
- 大浜憲二1996「八重山農耕図」『日本農書全集71 絵農書1』
- 沖縄県立博物館1997『考古資料から見た沖縄の鉄器文化』
- 鹿野忠雄1946「マノボ族の介製稲穂摘具－東南亜細亜の介製穂摘具と石包丁の関連－」『東南亜細亜民族学先史学研究』第1巻
- 金関丈夫1955「八重山群島の古代文化」（『琉球民族誌』法政大学出版局、1978年に所収）
- 神崎宣武1983「粟の穂刈り、稲刈り」『琉球諸島の民具』未来社
- 甲元真之1975「鎌による収穫法」『えとのす』
- 近藤義郎1960「農具の始まり」『世界考古学体系2』平凡社
- 篠原徹1988「苗族の穂摘具」『考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論集
- 下條信行1980「東アジアにおける外湾刃石包丁の展開－中国・朝鮮・日本」『鏡山猛先生古稀記念 古文化論攷』
- 徐大鵬（松中由美子訳）1995「四川省成都市鳳凰山出土の前漢時期炭化水稻とその関連遺物」『東アジアの稲作起源と古代稲作文化』
- 陳文華1985「従出土文物看漢代農業生産技術」『文物』1985-8
- 陳文華（渡部武訳）1989「漢代における長江流域の水稻栽培と農具の完成」『中国の稲作起源』六興出版
- 陳文華2002『農業考古』20世紀中国文物考古發現與研究叢書 文物出版社
- 寺沢薫1991「収穫と貯蔵」『古墳時代の研究第4巻 生産と流通 I』雄山閣
- 寺沢薫1995「中国古代収穫具の基礎的研究」『東アジアの稲作起原と古代稲作研究』

- 外山秀一1995「稲作の波及と初期水田の立地」『古代の環境と考古学』古今書院
- 中村慎一1996「書評 和佐野喜久生編『東アジアの稲作起源と古代稲作文化』」『古代学研究』
133
- 中村慎一2002『稲の考古学』同成社
- 那覇市教育委員会1996『那崎原遺跡－那覇空港ターミナル用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告』那覇市文化財調査報告書第30集
- 林巳奈夫1992『中国古代の生活史』吉川弘文館
- 日野 巖1963「琉球における摘穂」『宇部短期大学学術年報第3号 琉球学術調査報告』
- 榎林啓介2008「中国新石器時代における農耕文化の形成と変容－黄河・長江流域における農耕具・加工調理具を中心にして－」『東アジアの文化構造と日本の展開』熊本大学拠点形成研究プロジェクト
- 三島格1989「イネの高刈り」『南島考古学－南島・大和および台湾・華南』、第一書房（1971年初出『古代文化』23-9・10）
- 盛本勲・比嘉優子1994「沖縄出土の貝庖丁様製品について」『南島考古』14
- 寄川和彦2003「八重山人頭税廃止百年記念展より「八重山嶋農具類并士族平民風俗之図」」『人頭税廃止百年記念誌あさばな』
- 渡部 武1991『画像が語る中国の古代』平凡社
- 渡部 武2010「水田稲作の原風景と多様性」『ユーラシア農耕史』第5巻、臨川書店